

## 共感性と対人的迷惑認知、迷惑認知の根拠との関連<sup>1),2)</sup>

### ——行為者との関係性による違いの検討

小池 はるか

独立行政法人科学技術振興機構

吉 田 俊 和

名古屋大学大学院教育発達科学研究科

本研究の主な目的は、共感性と特定の人物に対する対人的迷惑行為の認知との関連を検討することである。学生113名から質問紙((1)共感性, (2)顔見知りから受けた行為の迷惑認知, (3)友人から受けた行為の迷惑認知, (4)迷惑認知の評定の根拠)の回答を得た。その結果、共感性の低い者は、共感性の高い者に比べ、行為を迷惑と認知しやすいという仮説が部分的に支持された。また、状況依存的な共感性が高い者は、迷惑認知評定をする際に、自己の視点のみではなく、行為者の視点に立っている傾向が示された。さらに、友人からの行為より顔見知りからの行為を迷惑と認知したり、行為者が顔見知りの場合より友人の場合に状況依存的な共感性が高くなるといった結果が示され、行為者との関係性が対人的迷惑認知及び共感性に影響を与えていることが明らかとなった。

キーワード：対人的迷惑行為、共感性、関係性、友人、顔見知り

### 問題と目的

#### 社会的迷惑行為

近年、迷惑行為が社会問題化している。例えば、放置自転車や違法駐車、タバコの吸殻や空き缶等のポイ捨て、路上喫煙などである。最近では、公共の場における迷惑行為に対して、多くの都市が条例を制定する等の対策を講じている(e.g., 千代田区, 2002; 名古屋市, 2004; 大阪市, 1995)。

このような社会的ニーズに伴い、社会心理学の

分野でも、公共の場における迷惑行為に関する研究がなされている(e.g., 菅原・薊・藤澤・永房・佐々木, 2005; 吉田・安藤・元吉・藤田・廣岡・斎藤・森・石田・北折, 1999)。代表的な迷惑行為研究である吉田他(1999)では、迷惑行為全般を社会的迷惑行為と定義している。社会的迷惑行為とは、上記のような行為のことであるが、それ以外にも「約束を破る」「借金をする」「グチを言う」といった特定の人物に対して行なわれる社会通念上の迷惑行為も含まれている。しかし、後者の迷惑行為に関する研究は数少ない。

#### 対人的迷惑行為

小池・吉田(2005)は後者の迷惑行為に着目し、それらの行為を対人的迷惑行為と定義した。対人的迷惑行為には以下の2つの特徴がある。(a)未知の人物に対しては行なわれにくい。例えば、初対面で今後二度と会うことのない人物に対しては、借りたお金を返すことができない等の事情もあ

1) 本研究の一部は、日本社会心理学会第46回大会(2005)で発表された。

2) 本論文の英文抄録をご校閲いただきました名古屋大学大学院の高井次郎先生、海上智昭さんに深く感謝いたします。また研究協力者の皆様をはじめ、本研究にご助力をいただいた方々に対して深く御礼申し上げます。

て、「借金をする」という行為が実行されるとは考えにくい。つまり、対人的迷惑行為は、既にある程度に関係にあり今後も関係を続けていく人間関係の中で起きることが多い。(b) 今後も続いていく人間関係の中で起きるがゆえに、対人的迷惑行為の実行が原因となって行為者と被行為者間の関係悪化・崩壊につながりうる。対人的迷惑行為は実行されることが少ないが(小池・吉田, 2005), 少ないゆえにかえって行為の不適切さが際立ち、決定的な関係崩壊につながる可能性がある。

このような行為に関する知見は、対人関係研究に有益であると考えられる。そこで、本研究においては、社会的迷惑の中の対人的迷惑行為に着目する。

#### 行為者との関係性と迷惑認知

まず、同じ迷惑行為であっても行為者との関係性により迷惑認知に差異があるのかを検討する。関係性の操作には山中(1994)の基準を採用する。山中(1994)では、親密性のレベルを、最も低い親密性レベル1(顔や名前は知っている程度の同性の友だち), レベル2(会えば話をする程度の同性の友だち), レベル3(ある程度親しい同性の友だち), そして最も高いレベル4(最も親しい同性の友だち)の4つに分類している。本研究では、レベル1を顔見知り, レベル3もしくはレベル4を友人と定義する。Koike(2004)では、顔見知りからの行為を、友人からの行為よりも迷惑と認知することが明らかになっている。ただし、この研究で用いられた尺度項目だけではその行為が行なわれている状況を想像することが困難であり、調査対象者にとって回答しづらい。そこで本研究は、詳細な状況設定が可能な場面想定法を使用し、顔見知りからの行為を、友人からの行為よりも迷惑と認知するという知見を再確認する(仮説1)。

#### 共感性と迷惑認知

対人的迷惑認知に影響を与える要因として、共感性を取り上げる。Jones & Nisbett(1972)では、観察者は行為者の行為の理由を行為者自身に帰属

しがちであることが示されている。すなわち、迷惑行為者を見た者は、迷惑行為実行の理由を行為者自身の特性によるもの(例、行為者が自己中心的な性格だから)と判断しがちであると考えられる。ところが、Betancourt(1990)やRegan & Totten(1975)によると、観察者の共感性が高い場合には、行為者の行為の理由を状況によるもの(例、やむを得ない事情だったから)と判断するという。このことから、共感性の高い者は、迷惑行為というネガティブな行為を実行した原因を状況に帰属することによって、迷惑と認知しにくくなると予測される。一方、共感性の低い者は、行為実行の原因を行為者自身の特性に帰属するため、行為を迷惑と認知しやすくなると考えられる(仮説2a)。

なお、「相手の感情と同じものを自分の中で経験する」といった情動的側面(e.g., Stotland, 1969)と、「相手の立場に立って物事を見て、相手を理解する」といった認知的側面(e.g., Dymond, 1948)の両側面を共感性とする立場(e.g., Davis, 1994 菊地記 1999; 菊池・有光, 2006)が昨今の主流であり、本研究でも両側面を共感性と定義する。また、共感性には、特性としての共感性と状況依存的な共感性が存在することも確認されている(Davis, 1994 菊地記 1999)。本研究では、特性としての共感性及び状況依存的な共感性の両方を共感性と定義し、測定することとする。Davis(1994 菊地記 1999)によると、従属変数に対し特性としての共感性は「ほどほど」の影響力を持ち、状況依存的な共感性は大きな影響力を持つとされていることから、特性としての共感性より、状況依存的な共感性の方が迷惑認知に対して強く影響すると考えられる(仮説2b)。

#### 行為者との関係性と状況依存的な共感性

さらに、関係性が状況依存的な共感性に与える影響についても検討を行なう。Davis(1994 菊地記 1999)によると、行為者のことをよく知っている場合には行為意図を状況的な要因に帰属する傾向があり、その原因として行為者の立場に立ち行為

者の感情を推測していることが考えられるとしている。また、友人に対しては「信頼感」といった感情を抱きやすく (La Gaipa, 1977), 友人の特性をポジティブに捉えていることが多い。その友人が迷惑行為を実行した場合、「なぜあんな良い人が迷惑行為をしたのか」と熟慮すると予測される。一方、親密でもなくあまり知らない顔見知りに対しては、行為者の立場に立ち行為者の感情を推測するとは考えにくい。あらゆる対象, あらゆる状況に対して共感性を發揮することは難しいからである (Koike & Yoshida, 2006)。このことから、行為者が顔見知りである場合よりも、行為者が友人である場合の方が状況依存的な共感性が高くなると予測される (仮説3)。

## 仮説

- (1) 顔見知りからの行為を、友人からの行為よりも迷惑と認知する。
- (2) a 特性としての共感性及び状況依存的な共感性の低い者ほど、行為を迷惑と認知する。  
b 特性としての共感性より、状況依存的な共感性の方が迷惑認知に対して強く影響する。
- (3) 行為者が顔見知りである場合より、行為者が友人である場合の方が、状況依存的な共感性が高い。

仮説 (1)~(3) をまとめると、本研究では、行為者との関係性により状況依存的な共感性の高低が決まり、その状況依存的な共感性の高低により迷惑認知が決まるという流れを検討することとなる。

さらに、迷惑認知の評定の根拠について自由記述法で回答させ、共感性の高低により迷惑認知の仕方に違いがあるか、またどのような根拠に基づき迷惑認知をしているのかを探索的に検討する。

## 方法

### 調査対象者

東海地方の大学生及び専門学校学生の 113 名

(男性 18 名, 女性 95 名) であった。調査時期は 2003 年 7 月であった。講義を受講する学生を対象に実施された。平均年齢は, 19.64 歳 (18~25 歳, 標準偏差は 1.63 歳) であった。

### 質問紙

**質問紙 A : 提示場面の設定 (Appendix 1)** 小池・吉田 (2005) で用いられた「何時だろうが気にせず電話をする」(以下, 電話場面), 「愚痴をこぼす」(以下, 愚痴場面) の 2 場面を使用した。小池・吉田 (2005) で使用された場面は調査対象者が当該行為を実行するかどうかの判断をするという設定であったが, 本研究では調査対象者が登場人物から当該行為を受けるという設定に改変した。さらに各場面について, 登場人物である行為者が同じ学年の顔見知りであるもの (以下, 顔見知り場面) と仲の良い友人であるもの (以下, 友人場面) を設定し, 計 4 場面を作成した。本質問紙では, 4 場면을対象者に提示したが, 提示順の影響をなくすため, 質問紙によって提示順を変え, カウンターバランスを行なった。(a) 迷惑認知に関する評定: 各場面において「迷惑だと思うか」について回答を求めた。回答形式は, 「当てはまらない (1 点)」~「当てはまる (5 点)」までの 5 件法であった。得点が高いほど迷惑と認知していることを示す。(b) 場面における共感的配慮: 状況依存的な共感性を測定する項目である。各場面において, 行為者 (登場人物) に配慮の気持ちを持っているかについて回答を求めた。回答形式は (a) と同じとした。得点が高いほど, 相手に配慮の気持ちを持ったことを示す。(c) 場面における視点取得: 状況依存的な共感性を測定する項目である。各場面において, 行為者 (登場人物) の立場に立っているかについて回答を求めた。回答形式は (a) と同じとした。得点が高いほど, 視点取得を行なったことを示す。(d) 迷惑認知の評定の根拠: (a) の評定をした理由について, 自由記述法で回答を求めた。

**質問紙 B : 共感性尺度 (Appendix 2)** 特性と

しての共感性を測定する尺度である。小池 (2003) を使用した。この尺度は、共感性の情動的側面を測定する情動的共感性因子と認知的側面を測定する認知的共感性因子の 2 因子で構成される。回答形式は (a) と同じとした。

### 手続き

目的の違う調査として、二組の質問紙を配布した。目的の違う調査だと思い込ませることで、共感性尺度と迷惑認知の評定がお互いに与える影響を緩和させる狙いがあった。また、2つの調査がそれぞれ別のものであることを強調するため、本人の許可を得た上で、質問紙 B の調査者の名前に著者以外の人物の名前を使用した。調査終了後、調査目的及び調査目的上必要であった手続き（偽の調査者名を用いたことや二組の質問紙が同一目的であったこと）についてディブリーフィングを行なった。

## 結 果

各場面の共感的配慮得点と視点取得得点の関連を検討したところ、相関係数が .49~.82 と中程度以上の強さだったため、両得点を合計し、「状況依存的な共感性得点」とした。

### 行為者との関係性による対人的迷惑認知の差異

行為者との関係性による対人的迷惑認知の差異を検討するため、関係性（被験者内：友人・顔見知り）×行為（被験者内：愚痴・電話）の 2 要因分散分析を行なった。その結果、関係性の主効果 ( $F(1,112)=7.71, p<.01$ )、及び行為の主効果 ( $F(1,112)=136.45, p<.001$ )が見出された。関係性については、行為者が友人である場合よりも、顔見知りの場合に迷惑と認知していることが明らかとなった（愚痴場面では顔見知り  $M=2.77, SD=1.23$ , 友人  $M=1.72, SD=.95$ ；電話場面では顔見知り  $M=3.16, SD=1.47$ , 友人  $M=2.01, SD=1.18$ ）。このことから仮説 1 は支持された。行為については、愚痴が電話より迷惑と認知されていた。

**Table 1** 共感性と対人的迷惑認知との相関係数

	情動的 共感性	認知的 共感性	状況依存的な 共感性
顔見知り・愚痴	-.02	-.04	-.20*
友人・愚痴	-.09	-.11	-.19*
顔見知り・電話	-.10	-.18	-.55**
友人・電話	-.17	-.36**	-.32**

\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$

### 共感性と対人的迷惑認知との関連 (Table 1)

共感性と対人的迷惑認知との相関係数を算出したものを、Table 1 に示す。これらの相関は、共感性の低い者は高い者より行為を迷惑と認知していることを示している。ただし有意な相関がみられなかった部分もあることから、仮説 2a は部分的に支持にとどまった。また、特性としての共感性と迷惑認知との相関、及び状況依存的な共感性と迷惑認知との相関の差の有意差検定を行なったところ、顔見知り・電話場面において、特性としての共感性よりも状況依存的な共感性の方が迷惑認知との間の相関係数が高かった（情動的共感性  $z=-3.86, p<.001$ , 認知的共感性  $z=-3.25, p<.01$ ）。その他の場面では、有意差はみられなかった。このことから、仮説 2b は部分的に支持されたとと言えるだろう。

### 行為者との関係性による状況依存的な共感性の差異

行為者との関係性が状況依存的な共感性に与える影響を検討するため、関係性（被験者内：友人・顔見知り）×行為（被験者内：愚痴・電話）の 2 要因分散分析を行なった。その結果、関係性の主効果 ( $F(1,112)=16.31, p<.001$ )、及び行為の主効果 ( $F(1,112)=48.99, p<.001$ )が見出された。関係性については、行為者が顔見知りである場合よりも、友人である場合に状況依存的な共感性得点が高いことが明らかとなった（愚痴場面では顔見知り  $M=5.72, SD=2.27$ , 友人  $M=6.89, SD=2.28$ ；電話場面では顔見知り  $M=6.45, SD=2.54$ , 友人  $M=7.58, SD=2.13$ ）。このことか

ら仮説3は支持された。行為については、愚痴場面よりも電話場面において状況依存的な共感性得点が高くなった。

### 自由記述の分類

自由記述の分類は、石田・吉田・藤田・廣岡・齋藤・森・安藤・北折・元吉 (2000) の社会的迷惑認知の根拠をカテゴリーに分類した際に用いられた判定基準を参考にした。これに加え、採集された自由記述をもとに基準を新たに作成し、心理学を専攻する大学院生2名による分類を行なった (Table 2)。その結果、89.9%の一致率が得られた。以下がその判定基準である。①「自己」カテゴリー：他者の立場に立たず自分の立場 (感情, 欲求) からのみ判断していると考えられる記述である。②「行為者」カテゴリー：行為者の立場から判断していると考えられる記述である。③「第三者」カテゴリー：行為者・被行為者 (自分) 以外の人物に関する記述である。④「ルール」カテゴリー：ルールやマナー, 規範に関する記述である。⑤「関係性」カテゴリー：行為者との関係性に関する記述である。⑥「状況」カテゴリー：状況に

関する記述である。記述が複数のカテゴリーに当てはまる場合には、重複して分類された。いずれの場面でも記述率が5%未満であった「第三者」カテゴリーは、カテゴリーとして意味をなさない と判断し、本研究では分析の対象外とした。

### 共感性の高低による根拠記述の差異

共感性下位尺度得点及び状況依存的な共感性得点の平均値を基準として、共感性高群と低群に分類した。共感性下位尺度得点の高低で、迷惑認知の評定の根拠に違いはみられなかった。状況依存的な共感性については、各場面とも、高群は低群ほど自己カテゴリーの記述をしておらず (顔見知り・愚痴場面  $\chi^2(1)=5.28, p<.05$ ; 友人・愚痴場面  $\chi^2(1)=5.71, p<.05$ ; 顔見知り・電話場面  $\chi^2(1)=23.01, p<.001$ ; 友人・電話場面  $\chi^2(1)=8.74, p<.01$ ), 高群は低群より行為者カテゴリーの記述をした (顔見知り・愚痴場面  $\chi^2(1)=12.65, p<.001$ ; 友人・愚痴場面  $\chi^2(1)=6.58, p=.01$ ; 顔見知り・電話場面  $\chi^2(1)=24.85, p<.001$ ; 友人・電話場面  $\chi^2(1)=9.68, p<.01$ ) ことが確認された。また、顔見知り・愚痴場面での

Table 2 各カテゴリーの記述例

カテゴリー	記述例
自己	<ul style="list-style-type: none"> <li>・関心がないのでなんとも思わない。グチをいうのをきくだけなら別に問題ない。</li> <li>・他の人にグチってほしい。</li> <li>・電話好きだから関係ない。</li> <li>・きかれたりすると教えたくなるタイプだから。</li> </ul>
相手	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話してて気がすめばそれで良いことなので聞いてあげる。</li> <li>・グチはキライなので聞きたくない。でも聞くからには、相手の立場とか考えて聞いたり話したりすると思う。</li> <li>・友達が留年する危険があるから。</li> <li>・Cさんは私しか聞けなかったのだろうかかと少し疑問に思う。</li> </ul>
ルール	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他人に関して、少しわきまえない人だと思う。</li> <li>・非常識だから。</li> </ul>
関係性	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仲のよい友達のことなら、なんでも聞いてあげたいし、聞きたい。</li> <li>・よく知らない私にそんなグチを言われるのはとても迷惑。私はグチなんて仲のいい友達にしか言わないし、もし、私とAさんが友達だったら不快になると思う。</li> <li>・仲がいいからべつにイヤとは思わない。</li> <li>・話した事がない人とはあまり話したくない。</li> </ul>
状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・同じ状況になったら、自分もグチを言うと思うから。</li> <li>・グチの内容にもよる。</li> <li>・相手は、私が寝ていると思っていないし、留年はかわいそうだから。</li> <li>・夜中に電話をかけてきたから。もっと早い時間に電話をしてきてほしかった。</li> </ul>

み, 状況依存的な共感性高群は低群ほど関係性カテゴリーの記述をしていなかった ( $\chi^2(1)=4.26$ ,  $p<.05$ )。

#### 根拠記述による迷惑認知評定の差異

顔見知り・愚痴場面と電話2場面において, 自己カテゴリーの記述をした者はしなかった者より行為を迷惑と認知し(顔見知り・愚痴場面 記述あり  $M=3.22$ ,  $SD=1.24$ , 記述なし  $M=2.18$ ,  $SD=.95$ ,  $F(1,111)=23.53$ ,  $p<.001$ ; 顔見知り・電話場面 記述あり  $M=4.13$ ,  $SD=1.00$ , 記述なし  $M=2.24$ ,  $SD=1.25$ ,  $F(1,111)=78.08$ ,  $p<.001$ ; 友人・電話場面 記述あり  $M=2.37$ ,  $SD=1.37$ , 記述なし  $M=1.76$ ,  $SD=.95$ ,  $F(1,111)=7.73$ ,  $p<.01$ ), 行為者カテゴリーの記述をした者はしなかった者より行為を迷惑でないとして認知していた(顔見知り・愚痴場面 記述あり  $M=2.03$ ,  $SD=.91$ , 記述なし  $M=3.12$ ,  $SD=1.21$ ,  $F(1,111)=22.92$ ,  $p<.001$ ; 顔見知り・電話場面 記述あり  $M=2.25$ ,  $SD=1.26$ , 記述なし  $M=4.09$ ,  $SD=1.03$ ,  $F(1,111)=72.45$ ,  $p<.001$ ; 友人・電話場面 記述あり  $M=1.68$ ,  $SD=.89$ , 記述なし  $M=2.42$ ,  $SD=1.39$ ,  $F(1,111)=12.04$ ,  $p=.001$ )。また, 電話2場面において, ルールカテゴリーの記述をした者は記述しなかった者より行為を迷惑と認知していた(顔見知り場面 記述あり  $M=4.38$ ,  $SD=.72$ , 記述なし  $M=2.96$ ,  $SD=1.47$ ,  $F(1,111)=14.18$ ,  $p<.001$ ; 友人場面 記述あり  $M=4.17$ ,  $SD=.41$ , 記述なし  $M=1.89$ ,  $SD=1.08$ ,  $F(1,111)=26.10$ ,  $p<.001$ )。さらに, 顔見知り・愚痴場面において, 関係性カテゴリーの記述をした者は, 記述しなかった者より行為を迷惑と認知した(記述あり  $M=3.07$ ,  $SD=1.18$ , 記述なし  $M=2.45$ ,  $SD=1.21$ ,  $F(1,111)=7.42$ ,  $p<.01$ )。一方, 友人・電話場面において, 関係性カテゴリーの記述をしなかった者の方が, 記述した者より行為を迷惑と認知している傾向が認められた(記述あり  $M=1.71$ ,  $SD=.97$ , 記述なし  $M=2.14$ ,  $SD=1.24$ ,  $F(1,111)=3.29$ ,  $p<.10$ )。この点については,

考察で述べる。

## 考 察

#### 諸要因と迷惑認知との関連について

同じ行為であっても, 顔見知りからの行為を友人からの行為よりも迷惑と認知しており, 仮説1は支持された。

また, 共感性が高いほど行為を迷惑と認知しないという仮説2aは部分的に支持された。加えて, 部分的ではあるが, 特性としての共感性より, 状況依存的な共感性の方が迷惑認知との間に強い相関を持っていたことから, 仮説2bは部分的に支持された。仮説2bの部分的支持は, 迷惑認知に直接的に影響を与えるのは, 共感性の高さという個人特性ではなく, 行為が実行された場面で行為者の視点に立ち行為者の感情を推測できるかどうかであることが示唆される。また, Redmond (1995)は, 一般的な人々に対する共感性と, 特定の人物に対する共感性は異なると指摘している。共感性尺度は一般的な人々に対する共感性を尋ねる形式に, 状況依存的な共感性は提示場面の登場人物に対する共感性を尋ねる形式になっている。このことも, 共感性尺度下位因子との間の相関と, 状況依存的な共感性との間の相関が異なる理由の1つとして考えられるだろう。ただし, 場面によって2つの相関に差がみられなかった部分もあることから, 今後更なる検討が必要である。

#### 関係性と場面における共感性との関連について

行為者が顔見知りである場合よりも, 友人である場合に場面における共感性得点が高いという結果から, 仮説3は支持された。この仮説3の支持と仮説2bの部分的支持を合わせて考えると, 行為者との関係性によって状況依存的な共感性の高低が決まり, その状況依存的な共感性の高低が迷惑認知をするかしないかの判断を決定するという先述の流れが想定される。仮説1が支持されるといふ結果は, この一連の流れによって解釈できる。

### 共感性と迷惑認知評定の根拠の記述との関連について

状況依存的な共感性が高い群は、低い群に比べ自己に関する記述をせず、行為者に関する記述をしていた。自己に関する記述は迷惑かどうかの判断をする際に自分の視点のみしか用いていないことを、行為者に関する記述は行為者の視点をを用いていることを示している。この結果によって、状況依存的な共感性の妥当性が確認されたといえる。ここでも共感性尺度下位因子は関連を示しておらず、共感性の高さという個人特性は対人的迷惑認知に関する事柄に直接的な影響力を持っていないと考えられる。ただし、共感性尺度下位因子と状況依存的な共感性との間に弱い正の相関が見出されている。特に、認知的共感性因子は、どの場面においても場面における共感性との間に正の相関が見出された ( $r=.19\sim.30$ )。このことから、「特性としての認知的共感性→状況依存的な共感性→迷惑認知」という間接的な影響を与える可能性も考えられる。特性としての共感性と状況依存的な共感性について述べた Davis (1994) は、このような間接的影響を想定している。

### 迷惑認知評定とその根拠の記述との関連について

4場面中3場面において、自己カテゴリーの記述をした者はしなかった者より行為を迷惑と認知し、行為者カテゴリーの記述をした者はしなかった者より行為を迷惑でないとして認知していた。これは、状況依存的な共感性が低いほど迷惑と認知するという仮説 2b を支持するものであると考えられる。

電話場面においては、行為者との関係に関わらず、ルールカテゴリーの記述をした者のほとんどが行為を迷惑と認知していた。「夜遅くの電話＝マナー違反」等の一般的なルールを意識すると、行為者の事情を考慮せず行為を迷惑と認知することを示唆している。

関係性カテゴリーの記述が迷惑認知に与える影響は、行為者との関係によって異なっていた。友

人・電話場面の関係性カテゴリーの代表的な記述は「仲が良い」「友達」といった関係性が高いと捉えるものであり、これらの記述があるほど行為を迷惑と認知しない傾向が認められた。一方、顔見知り・愚痴場面の関係性カテゴリーの代表的な記述は「あまり仲良くない」「よく知らない」といった関係性が低いと捉えるものであり、これらの記述があるほど行為を迷惑と認知していた。両場面の関係性カテゴリーの代表的な記述から、「顔見知りの迷惑行為＝迷惑」「友人からの迷惑行為＝迷惑でない」という認識が人々の間で比較的共有されていることがわかる。また、4場面中3場面で共感性が関係性の記述に影響していないにも関わらず、関係性の記述の有無によって迷惑認知に差異が出ていることから、前述の「関係性→状況依存的な共感性→迷惑認知」という影響の仕方だけでなく、関係性が迷惑認知に直接影響を与えている可能性も考えられる。畠山 (2003) は親密さが低いほど葛藤回避が重要になると指摘しているが、そのような原因は、関係性が低いと相手に共感しづらく、ちょっとした行為でも迷惑と認知されやすいからかもしれない。すなわち、関係性が低い相手の行為は迷惑と認知しやすいので、極力葛藤を回避しよう心がけているという解釈も成り立つ。また、文化心理学的な視点から見ると、「外」よりも「内」に対して甘いという日本人の特質 (土居, 1971) とも考えられる。

なお、迷惑認知の根拠による影響がみられなかった友人・愚痴場面では、ほとんどの調査対象者が行為を迷惑でないとして認知しており、このことが有意差を示さなかった原因として考えられる。なお、当該場面ではほとんどが迷惑と認知しなかった理由としては、愚痴という行為の持つ特徴が関連していると思われる。吉田他 (1999) の迷惑認知尺度の因子分析では、「何時だろうが気にせず電話をすること」はルール・マナー違反行為因子に、「ひんぱんに愚痴をこぼすこと」は周りの人との調和を乱す行為因子に含まれている。電話にはある

程度決められたマナーがある一方, 愚痴に関しては明確なマナーがないため, 迷惑と認知しづらい。加えて, 前述のように関係性が高いほど行為を迷惑としにくいこと, 愚痴が「ひんぱん」ではなく「今回が初めて」と受け取れるような場面設定であったことから, 友人・愚痴場面でほとんどの調査対象者が迷惑と認知しなかったと考えられる。

## 結 論

本研究では「特性としての認知的共感性 → 状況依存的な共感性 → 迷惑認知」「関係性 → 状況依存的な共感性 → 迷惑認知」「関係性 → 迷惑認知」という3つの影響の仕方が見出された。本研究では2つの対人的迷惑行為を扱っただけであるため, 他の対人的迷惑行為に関しても同じような影響の仕方をするのか検討する必要があるだろう。また, 本研究では調査対象者に男女の偏りがあったため, 性差の検討は行なわなかった。しかし, 迷惑認知に性差が認められる可能性は捨てきれない。Hays (1985) によると, 男性同士の友情は活動の共有, 女性同士の友情は自身に関する言語的コミュニケーションによって進展するとしている。例えば愚痴のような行為は, 女性の友人同士で行なわれる場合には友情を進展させるための重要なコミュニケーションとなり, 女性は男性よりも迷惑と認知しない可能性がある。よって, 性差については今後検討していく必要があるだろう。

## 引用文献

- Betancourt, H. (1990). An attribution-empathy model of helping behavior: Behavioral intentions and judgments of help-giving. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **16**, 573-591.
- 千代田区 (2002). 安全で快適な千代田区の生活環境の整備に関する条例 千代田区環境整備条例 2002年6月25日 (<http://www.poisute.com/jyourei.html>) (2006年5月8日)
- Davis, M. H. (1994). *Empathy: A social psychological approach*. Boulder: Westview Press.
- (デイヴィス, M. H. 菊池章夫 (訳) (1999). 共感の社会

- 心理学 川島書店)
- 土居健郎 (1971). 「甘え」の構造 弘文堂
- Dymond, R. F. (1948). A preliminary investigation of the relation of insight and empathy. *Journal of Consulting Psychology*, **12**, 127-133.
- 畠山 寛 (2003). 青年期の友人関係のルールに関する研究——親友と友人に関して—— 鳥取短期大学研究紀要, **48**, 49-57.
- Hays, R. B. (1985). A longitudinal study of friendship development. *Journal of Personality and Social Psychology*, **48**, 909-924.
- 石田靖彦・吉田俊和・藤田達雄・廣岡秀一・斎藤和志・森久美子・安藤直樹・北折充隆・元吉忠寛 (2000). 社会的迷惑に関する研究 (2)——迷惑認知の根拠に関する分析—— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), **47**, 25-33.
- Jones, E. E., & Nisbett, R. E. (1972). The actor and the observer: Divergent perceptions of the causes of behavior. In E. E. Jones, D. E. Kanouse, H. H. Kelly, R. E. Nisbett, S. Valins, & B. Weiner (Eds.), *Attribution: Perceiving the causes of behavior*. Morristown, N.J.: General Learning Press. pp. 1-26.
- 菊池章夫・有光興記 (2006). 新しい自己意識的感情尺度の開発 パーソナリティ研究, **14**, 137-148.
- 小池はるか (2003). 共感性尺度の再構成——場面想定法に特化した共感性尺度の作成—— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), **50**, 101-108.
- Koike, H. (2004). Relations to empathy and perception of interpersonal annoyance from an acquaintance or a friend. Poster presented at the 28th International Congress of Psychology, Beijing, China.
- 小池はるか・吉田俊和 (2005). 対人的迷惑行為実行頻度と共感性との関連——受け手との関係性についての検討—— 東海心理学研究, **1**, 3-12.
- Koike, H., & Yoshida, T. (2006). The relationships between frequency of occurrence, perception of degree of annoyance, empathy, and social consideration. Poster session presented at the 26th International Congress of Applied Psychology, Athens, Greece.
- La Gaipa, J. J. (1977). Testing a multidimensional approach to friendship. In S. Duck (Ed.), *Theory and practice in interpersonal attraction*. New York: Academic Press. pp. 249-270.
- 名古屋市 (2004). 安心・安全で快適なまちづくりなごや条例 名古屋市公式ウェブサイト 2005年4月4



- 日 ([http://www.city.nagoya.jp/shisei/jourei/anshin\\_anzen/](http://www.city.nagoya.jp/shisei/jourei/anshin_anzen/)) (2006年5月8日)
- 大阪市 (1995). 大阪市空き缶等の投げ捨て等の防止に関する条例 大阪市 1995年11月1日 (<http://www.city.osaka.jp/kankyojigyo/sec02/poi/jorei.html>) (2006年5月8日)
- Redmond, M. V. (1995). A multidimensional theory and measure of social decentering. *Journal of Research in Personality*, **29**, 35–58.
- Regan, D. T., & Totten, J. (1975). Empathy and attribution: Turning observers into actors. *Journal of Personality and Social Psychology*, **32**, 850–856.
- Stotland, E. (1969). Exploratory investigation of empathy. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol. 4. New York: Academic Press. pp. 271–314.
- 菅原健介・薊理津子・藤澤 文・永房典之・佐々木淳 (2005). 公共場面における行動基準と問題行動 (1) — “世間” の崩壊と公衆場面における行動基準— 日本心理学会第69回大会発表論文集, 203.
- 山中一英 (1994). 対人関係の親密化過程における関係性の初期分化現象に関する検討 実験社会心理学研究, **34**, 105–115.
- 吉田俊和・安藤直樹・元吉忠寛・藤田達雄・廣岡秀一・斎藤和志・森久美子・石田康彦・北折充隆 (1999). 社会的迷惑に関する研究 (1) 名古屋大学教育学部紀要 (心理学), **46**, 53–73.
- 2006.5.26 受稿, 2006.10.5 受理—

## Actor, Empathy, Perception of Interpersonal Thoughtlessness, and Grounds for the Perception

Haruka KOIKE<sup>1</sup> and Toshikazu YOSHIDA<sup>2</sup>

<sup>1</sup>Japan Science and Technology Agency

<sup>2</sup>Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2007, Vol. 15, No. 3, 266–275

The purpose of this study was to examine the relationship between empathy and perception of thoughtlessness, in the context of acts by friends and acquaintances. One hundred and thirteen (113) students completed a questionnaire designed to measure the respondent's empathy, perception of interpersonal thoughtlessness in acts of an acquaintance, such perception in acts of a friend, and grounds for the perception ratings they made. Results partially supported the hypothesis that individuals low in trait empathy were quicker to perceive thoughtlessness in the acts of others than those high. In addition, individuals high in situational empathy appeared to temper perception of thoughtlessness with the actor's perspective. Finally, our study confirmed that thoughtlessness of an acquaintance was perceived more negatively than that of a friend, and situational empathy scores were higher when the actor was a friend than an acquaintance.

**Key words:** interpersonal thoughtlessness, empathy, relationships, friends, acquaintances

## Appendix 1 提示場面（顔見知り場面）

&lt;愚痴場面&gt;

ある日、偶然、同じ学年で顔見知りのBさんと話す機会がありました。あなたはBさんとはあまり話したことがないので、どんな人なのかよく知りません。話の途中、Bさんは、「Aさんから悪口を言われてムカついている」とグチを言ってきました。あなたとAさんは顔見知りなのですが、仲がよいというわけではありません。Bさんは、このことを誰かに話したくてたまらなかったそうです。

&lt;電話場面&gt;

ある夜、眠っていたあなたのところに、電話がかかってきました。電話に出ると、あまり話したことはないけれども同じ学年で顔見知りのCさんからでした。「明日の1時限目の授業前に提出しなければならないレポートの題目がわからないので、教えてほしい。」ということでした。仲のよい友達はこの授業を受けていないので、顔見知りのあなたのところに電話をしてきたそうです。レポートは授業の単位に関わるもので、その授業を落としたら留年してしまうかもしれません。時計を見るとすでに夜中の12時でした。

注. 友人場面では、下線部が「仲の良い友達」になり、波線部の記述はない。

## Appendix 2 共感性尺度

情動的共感性	<ul style="list-style-type: none"> <li>・まわりの人たちが悩んだり苦しんだりしていても、平静でいることができる。(R)</li> <li>・他の人びとが問題をかかえていても、気の毒に思うことはない。(R)</li> <li>・人が沈み込んでいると、私は自分だけ平静でいられなくなってしまふ。</li> <li>・沈み込んでいる不幸な人を見ると、辛い気持ちになる。</li> <li>・自分より不幸な人々に対して、やさしさや配慮の感情を持てる。</li> <li>・他人が経験したことに、強く心を動かされたり、深く巻き込まれてしまふ。</li> <li>・その人の抱えている問題が、まるで自分の問題であるかのように感じられることがある。</li> </ul>
認知的共感性	<ul style="list-style-type: none"> <li>・物事を決めるには、みんなの反対意見をよく聞いてからにしようとする。</li> <li>・どんな問題にも2つの側面があるから、その両面を見るようにつとめている。</li> <li>・人と意見が合わない時には、その人がそうした意見を持つ理由を心の中であれこれと考えてみる。</li> <li>・他の人達よりも、人々の感情や気持ちを理解しようと心がけている。</li> <li>・友だちのことを理解しようとするときには、相手から見るとどう見えるのかを想像する。</li> <li>・非常に不機嫌そうな人に出会ったとき、「私がもしその人だったらどう感じているだろうか」を考えてみる。</li> </ul>

(R) 逆転項目